

3月を迎えました。いよいよ、お子様方の、卒園、進級を迎えます。
「おおきくなるということは」という哲学的な絵本を、この時期読み返します。
「おおきくなるってということは ちいさなひとにやさしくなれるってこと」と
教えてくれます。「ちいさなひとにやさしくなる」道筋は、人それぞれです。



園生活では、ちいさなひとにいとおしさを感じ優しくしようと考え行動に移す機会をたくさん持っています。と同時に「やさしくする」ことの難しさもきっと経験していることでしょう。人にやさしくする時も、やさしくなれない時も、お子様にとっては同じくらい大切な経験なのだと思います。

～豊かな感性をはぐくむ、子どもと家庭と園でつくる「おひさま文庫活動」～

保護者の方もお存じの通り、当園では、絵本文庫（おひさま文庫）があり、保育者による読み聞かせを毎日行っています。2歳児以上のお子様は、週1回、お子様自身が、おひさま文庫に足を運び、自分で絵本を選びおうちで保護者様に読んでいただき、その時のお子様の様子や読後感を「おひさま文庫カード」に記していただく読書活動もしています。

実は、この活動は、理事長の姉の古谷めぐみ副園長（当時）の発案で始まりました。今から40年以上も前の事です。古谷めぐみ副園長は、小学校の「国語教育」を長い間研究・指導しており、その後縁あって妹（現理事長）と共にうわまち幼稚園の教育の発展に尽力をしました。

さて、「感性をはぐくむ」とは何でしょうか。「価値あるものに気づく感覚を育てる」ことです。お子様は、園生活で様々な遊びや読書を通して感性を身につけます。幼児は、読み聞かせる大人との関わりも大きく影響を与え感性をはぐくむと考えられます。

お子様は絵と読み手の声から話を理解します。読み終わると、聞き手（お子様）も、読み手（おうちの方）も、感想を述べあっているのではないのでしょうか。そして年長さんになると、「僕（わたし）も読む！」と小さな手に絵本を乗せ、おうちの方に向けて読む微笑ましい光景もあるのではないのでしょうか。さらに自分で作ったお話や絵本を披露してくれることもありますか。読み聞かせる大人がいるからこそ、さらに広く言葉や感情を知り、さまざまな世界に飛び出して感性を育くむのです。

おうちの方も、はじめは絵本の読み聞かせは恥ずかしいと思っても、次第にお子様が進んでどんな絵本を選んでくるのか楽しみになりますか？言葉の繰り返しを親子で楽しんだり、ごっこ遊びにつながったり、絵本と同じ状況に遭遇してびっくりしたり…子どもを育てる時代に彩を添えてくれるのが「絵本」であるような気がします。私も絵本を通して、子どものそばにいたと感じます。「ひとりで見ておいで…」などと言わずにぜひお子様への読み聞かせを楽しんでください。

お子さまが選んだ本なのに、興味を全く示さないこともあるでしょう。そんな時には、おうちの方がページをめくり楽しんでください。日本ほど、子どもの為の絵本が充実している国はないそうです。

※古谷めぐみ氏（元副園長）が3月8日に89歳の人生を閉じました。
あらためて感謝の意を表します。



保護者様におかれましては1年間のご理解ご協力に深く感謝申し上げます。来年度もどうぞよろしくお願いいたします。